

寝床屋の無料配布

・ 会所騒動 ― とある料理茶屋にて ―
……

「おや、若旦那。こんなところでお会いできるたア、功德は積んどくもんですな」

幫間、はなすけ花助が料理茶屋の廊下を、すすすと滑るように近づいてくる。顔が映るのではと思うほどに丁寧に磨き上げられた廊下は、使っている木が良いのか、きしとも軋みを上げることとはなかった。だからだろう、余計に幫間の腹の出た体が近づいてくる様は、まるで夜道を追いかけてくる幽霊のようで、若旦那はぞつと怖気を覚えた。

「いやあ、見つかつちまいましたかあ」

はつと気を取り直して、あちゃあ、と手にした扇子でパシリと自らのおでこを打つ。

「あつ、酷い。酷うございますよ、若旦那！ 上がつちまつてしゃつちよこばつてらした、水揚げの座敷からの仲じゃアありませんか」

幫間が溢れてもない涙を袖で拭う。

「そうそう、釣り上げられた魚が心の臓が止まったみたいになって、流石海千山千の花魁も驚いちまつてオロオロしてたつけね……つて、女郎じゃあるまいし、水揚げな

んて言う人がありますか」

途中からそうそう、と笑う花助に、若旦那は袖で叩く真似をした。

「冗談は置いておいて。山の神をお迎えになつたてえ噂も聞いちゃいねえのに、アタシもとんとご無沙汰。最近は派手にお遊びにもならないってえから、てつきり蔭間になんぞハマったかと……」

「コレサ、料理茶屋の廊下でするにやア、大層際どい話をしてくれるじゃないか」
若旦那は困っているのだから、そうでもないのだから判らない調子で言う。

ここはお江戸の料理茶屋の中でも、小さな店だ。料理茶屋があちらにもこちらにも建ち始めた頃に出来た一つで、歴史はそこそこあるが、相当の金満家や通人でなければ手の届かないような店とも違う。勃興激しい中でも生き残つて来れたのは、料理と、女将の手腕によるものでもあり、この店を愛してやまない客が通い詰めて来たからである。

「ナニ、ちよいと親父様の手伝いを真面目にしてるだけサ。今日も遊びじゃアなくて、問屋仲間の席ですよ」

薬種問屋の旦那衆もこの店を支えて来た客筋の一つだ。

「お父っ様の？ お手伝い？ 真面目に？ 若旦那が？ あの、若旦那が？ とにかく話を聞いていられない、混ぜっ返さないと気の済まない、落ち着きのない、あの、若旦那が？」

花助が信じられないことを聞いた、と言わんばかりに声を震わせる。

「ちよいと、随分な物言いじゃないか。これでも良くやっている、旦那衆からはお褒めいただいたるんですよ」

若旦那が心外だと言わんばかりに口を尖らせる。

「ああ。古狸相手にこう、ね」

花助が手のひらを上にして、珠でも転がすように円を書いてみせるのを、そうそう、と若旦那が笑う。

「これ、調子に乗るな」

コツン、と後ろから静かに近づいてきていた老爺が、若旦那の頭をゲンコツで叩く。

「おや、浪江屋の大旦那」

「お前さん、こんなところで油を売ってないで、早くお見送りに行きなさい」

「いやあ、ちよいと懐かしい顔にバツタリ、ぶつかりましてね」

若旦那がいたずらが見つかつた子供のよな顔で笑う。

「最近ちよつとは真面目にやつてゐるかと思えば……」

「そう言う浪江屋の大旦那こそ、こんなとこで何してらつしやるんです？」

「なに、ちよいと帳場へ……」

大旦那と呼ばれた男がそう言うと、若旦那が帳場ですつて、と声を上げる。

「あつ！ ハハア。判つた、判つてしまいました」

「いや、私はね……、いや、こつちの話を……」

大旦那と呼ばれた老爺が、意味ありげに笑う若旦那を制しようとする。が、若旦那は風に乗つた千石船、いや初鯉おしよこを載せた押送り舟のように止まる気配がない。

「あいや、皆まで申されずとも結構」

妙に芝居掛かつた仕草で、大旦那を制したと思うと間髪入れずに続ける。

「いやいや、そうですか、そうでしたかあ。大旦那も隅に置けませんなあ。いや、まさか、この女将と……」

やるねえ、このこのお、なんて言いながら、若旦那が肘で大旦那を突く。大旦那の後ろを同じく見送りに出てきたと思しき女将を見つけると、むふふーと笑つた。

「若旦那、若旦那。お顔がイヤラシイですよ」

花助が窘めるつもりなのか、押揃うつもりなのか判らない調子で言う。

「いやあ、女将も変わりませぬねえ。流石は海千山千。料理茶屋の八百比丘尼。やり手女将なだけありますねえ」

「おや、憎らしい。人をバケモノみたいに言わないでくださいましな」

背こそ曲がつては居ないが、全体的に過ごした年月を顕にした女将が、それでもはつきりした口調で若旦那に微笑んでみせる。一目見ただけでは地味な着物だが、目を凝らせば鼠茶の僅かに違う色と太さの縦糸と横糸で、織りだけで模様を出した渋好み^{シブノミ}の着物。それを襟を控えめに抜いて着こなしている。手入れと掃除が良く行き届いて、経た年月が味になったこの店と同じで、ただの女将と侮れない空気を纏っている。

「で、浪江屋さんの甲斐性の程は？」

若旦那は袖で覆った手と口を寄せて、女将との内緒話のように装いながら、誰にでも聞こえる大ききさで言う。

「こ、この……、馬鹿者！」

大旦那が顔を真っ赤にして怒鳴った。声の大きさに、近くの障子がビリビリと震え

た。若旦那と幫間は思わず手で耳を塞ぐ。

「大旦那ったら、冗談も通じないんだからあ。そんな朴念仁だと、女將に捨てられま
すよお？」

浪江屋の大旦那とこの料理茶屋の女將は、何やら浅からぬ縁があるらしい。女將が
大旦那の囲い者なのでは、と言うのは、広く世間で囁かれている噂である。

もちろん、真偽のほどは判らない。

大旦那に聞いても「バカなことを言う暇があるなら、仕事をしろ」と言われてしまう。
女將に聞けば「おやおや、ほほほ」と笑ってはぐらかされてしまう。

だからこそ、気にしないそぶりをしながらも、誰もが暴きたいと思っていること
もあった。周りにいた使用人たちですら、聞き耳を立てて思わず固唾を呑む。

「言つて良いことと、悪いことの判断もつかぬかッ！」
廊下に大音声の雷が落ちた。

「ああ、まだ耳がおかしいや。若旦那のせいですよ」

花助がこめかみを叩いたり、耳に指を入れてみたりしながら、ぶつぶつと文句を言

う。

葉種問屋仲間の行事を務める、浪江屋の大旦那を揶揄った当の本人は、平気な顔を
して廊下を歩く。

「こんなことなら、声なんぞかけなきや良かった」

ちよつと恨みがましく言うのを聞いて、若旦那が袖で顔を覆う。

「アレサ、なんて冷たい言いようだろう。旦那衆をお見送りしたら、ちよいと座敷に
残るから、お前も呼んでやろうと思つていたのに。ここの美味しい美味しいお膳が手
付かずなんだけどなあ……」

そつと袖で目元を拭う。途端に花助が若旦那を拝まんばかりに手を合わせる。

「若旦那、イヤサ、若ナムアミ旦那様。何卒、このケチな幫間めにおこぼれを……」
が、よよよ、と更に芝居掛かった言葉聞いて花助は若旦那の袖を引っ張つて顔を
覗く。もちろん、泣いてなどいない。

二人でじつとりもの言いたげに顔を見合わせた。

「嘘泣きじゃありませんか」

「お前こそ。ありもしない信心にや感心するよ」

「おや若旦那。見損なわないでくださいまし。あたしにや立派な信心がござんす。足のある物はいつも拝んでおりますとも。長い仲なのに、ご存知なかったんで？」

花助がふふん、と胸を張って言い切るのに、若旦那もふつと笑ってしまう。

「こいつあ、謝った。チャリンと言えは、すかさずそちらを向くお前の信心の篤さには参るよ」

「ナニ、どこへ参らずともようございます。立派なお宮はなくとも信心に勝るものはなし。さあ、懐に手を合わせなさいまし」

そう言つて、花助は自分の腹を見るように俯いて、ナムオアシダイミヨウジンとブツブツ呟いて手を合わせた。

旦那衆が集まっていたと言う座敷は、膳と酒の用意がされていたものの、膳にはほとんど手をつけなかったらしい。

乱雑に取り残された盃と座布団が、綺麗に並んだ銘々膳の中で妙に浮かび上がっている。

まさに宴の後、と言う感じだ。鶴、松と言った目出度い襖絵と、料理人が手を掛け

た自慢の料理が侘びしささえ感じさせた。

若旦那と幫間は、座敷を回って酒が残っているか、銚子を振る。そして、残っていた銚子と盃を手に、どっかりと座敷に座り込んだ。

「ささ、若旦那」

「ああ、貰おうか」

互いの盃に酒を注いで、ぐいと傾けた。

「ああ、つるりと喉を落ちて、胃の腑から五臓六腑に染み渡りますなあ。流石は問屋仲間の旦那衆。まことに良い酒さかでございます」

待ちかねたようにグビりと飲んだ花助が、酒を煽った顔を天井に向けたまま酒の余韻を楽しむように呟く。

「御託は良いから、もう一つおやり」

若旦那が空いた盃に酒を注ぐ。

「おおっとと。ああ、こりゃこりゃ。って、若旦那、判ってませんねえ。アタシ達幫間は、こうしてあれこれお酒を味わうのも勤めの内ですよ」

「良い酒を出す旦那を探すためだろう」

「ナニ、そう言っちゃあ風情がございませんや」

「あのう、お座敷の片付け……」

そんなやり取りをする座敷に、入り口から若い女中が困ったように声をかけてきた。

「ああ、膳を二つ三つ、後は大皿から少しばかり取り分けたら、幾らか折り詰めにしておくれ」

若旦那は女中に言いつける。

「あ、あい。ええと、あのう、お酒はいかがなさいますか」

「ああ、冷で良いから銚子を二つばかり貰おうか」

まだここへ入って日がないのか、たどたどしく尋ねる女中に指示した。お仕着せの着物や前掛が真新しいし、木の櫛だけを指した髷の結い方も素朴だった。

借りた座敷にそのまま居残る、なんてその辺りの対応は、若女将や、この料理茶屋ができた頃から働いている歴戦の女中たちは、言わずとも判つてくれるのだから、流石である。

不慣れな女中が座敷を片付けていると、他の女中達が静かに入ってきた。他の座敷の用が済んだのだろう。そこからはあつという間に座敷が綺麗に片付けられていく。

その合間に言い付けた酒と、問屋仲間の席で手付かずだった膳と大皿から小さな皿へ盛り直した料理が運ばれてくる。

不慣れな女中が忘れずに板場へ言ったものか、顔馴染みの女中が気を利かせたのだらう。

ふむ、あの新しい女中も来年の今頃には、もう随分と垢抜けた鬘になっていることだろう。

ともあれ、今は酒と肴があればなんの文句もない。

若旦那と幫間は、瞬きの間に綺麗になっていく座敷を眺めながら、チビチビと酒を呑む。ぶち抜いていた座敷の襖が閉てられて、見えていた座敷がぐっと狭まった。

女中達が出際にすつと一礼して、廊下に通ずる襖を閉めると、若旦那と幫間はホッと息を吐いた。

おろおろあわあわしっぱなしだった、新入りの女中が心配だったのもあるし、他の女中達が来てからの片付く速さが息をも吐かせぬほどだったこともある。だが、一番の理由は、これからあまり人様には聞かせたくない話をするからである。

「進展はあったかい？」

湿すように一口、盃から酒を飲んだ若旦那が尋ねる。

「花はな一のヤツ、どうやら座敷に潜り込めたようです。ですがね……」

続く言葉を飲み込んで、ふう、と大きな溜め息を吐きながら花助が扇の尻でコリコリとこめかみを掻いた。

「人使いが荒いの、ワガママが酷いの。つまらないことでしつこく怒鳴られたのと、散々愚痴を聞かされやしたよ。そんなお方ですから、幫間の入れ替わりも多いよ。」

ただ、今勢いのある商人ですから、座敷に入りたい幫間が多くて、難儀しておりますよ」

近頃、葉種問屋の会所を作り、その頭取に就こうと言う商人あきんどが出て来た。それも、問屋仲間どころか、葉種問屋でもないのだから、葉種業界隈は蜂の巣を突いたような騒ぎだった。

その渦中の商人は、葉種も扱う廻船問屋、田佐木屋と言う男だった。

狙いは、葉種の値や流通量を支配したいのだろうと言うのは読める。だが、何故葉種を狙ったのか。いや、むしろ会所の頭取になるだけが目的ではなからうと言うのを疑った若旦那は、田佐木屋を探るために、幫間仲間を頼って田佐木屋の座敷に入り込んでもらったのだ。

「へへえ。お前さんの弟子の中でも、ずいぶん肝の座った男だと思っただけども。相手は余程の野暮天みたいだねえ。片がついたら思い入れ労ってやらなきやあ」

「こりゃ、過分なお言葉で」

「それまでは済まないけど、お前さんも気をつけてやっておくれ」

花助がへえ、と頭を下げた。

「やつと、これからだからね」

鼻息も荒く言う若旦那に、花助はへえ、と返事した。

暫くポツポツと今後のことを話しながら、盃のやり取りをしていると、隣の座敷に客が案内された気配がした。襖越しに「酒」とぶつきらぼうに言いつける声が聞こえる。

「随分な空模様で」

「のようだねえ」

つい声を潜めた。元々話していた内容が内容だけに、あまり大きな声で喋ってはい

なかつたが、本人に聞こえてもいい話ではないから、余計に声が低くなる。

「伊関屋の旦那は、相変わらずあちこちへお出かけたそうだよ」

「旦那様もお忙しいようで。和吉わきちが寂しがっておりますよ。鯉野こいのの方は新しく旦那がついたみたいですが」

「そうですかあ。二人にも会いたいのですがね、流石に旦那抜きじゃア……」

油問屋を営む伊関屋の旦那は、若旦那にとつて兄貴分と言つても良い存在だ。そんな彼の馴染の幫間と花魁とも、座敷で会つたことがあつた。旦那が急に会いに来なくなつてしまつたと言うのは、客あつての商売と言う以上に心配でもあるだろう。特に鯉野の方は、伊関屋から落籍の話も出ていたと言う。伊関屋とは相惚れだったのか、若旦那達の知る所ではない。だが、苦界暮らしが終わるかもしれないと希望を持つていたとしたら、鯉野は複雑な思いでいるだろう。とは言え、事情を話すわけにもいかない所が、もどかしい所であつた。

女中が酒肴を運んでから一刻(約二時間)、隣の座敷は時折酒を頼む声以外はひっそりとしたものだった。

だが、その静寂が突然破られた。

「早く酒を持って来いつてんだよ！」

座敷を隔てる襖が震える程の怒鳴り声が響いた。

たまたま盃から酒を飲んでいた若旦那は、その土間声に驚いて、咳き込んでしまう。

「げっほ、げほ……、ごほ、……うべえ……」

「ああ、ああ。もうほれ、大丈夫ですかい」

涙目で咳き込み続ける若旦那の背を擦りながら、花助が手拭いを差し出す。若旦那は口に当てながら一頻り咳き込んで、涎と涙を拭き、鼻をかむ。

「うるせえ！ 俺はただの客じゃねえぞ！ 廻船なら田佐木屋、そこの番頭様だつてエんだよ！ 出せないの呑み過ぎだのとごちやごちや言つてねえで酒！ 酒を出せ！ 呑み過ぎだつてんなら、間が持つように芸者の一人でも呼んでこい！ 氣の利かねえ！」

隣の座敷からは、まだ怒鳴り声が響いている。

若旦那と花助は顔を見合わせた。

「い、い、い、今の聞いたかい」

「き、き、き、聞きましたとも」

まさかここで田佐木屋の名を聞くとは思わず、若旦那も花助も大慌てだ。声を潜めるのがやっとで、アワアワと手を振り回しながらも、廊下側の襖に近づいてそっと開ける。隣の座敷の方の廊下を覗くと、女中と若い衆が廊下に座らされている。当然隣の座敷からはまだ怒鳴り声が響いている。

「早くしろ！」

酒で呂律が回っていない声とともに、何かが座敷から飛び出して来て、壁に当たったと思うとがちゃん、と音を立てた。恐らく肴を載せた皿だろう。きやつ、と女中が怯えた声を上げた。例え歴戦の女中であろうとも、流石に間近に皿を投げつけられて、それが割れば可愛らしく叫ぶものである。いや、そんなことより、幾ら客とは言え皿を投げて人に当たったらどうするのだ。いやいや、更に料理を食べもしないで投げるなんて言語道断である。

この料理は、板場を預かる古株の料理人が、材料を厳選し、季節に合わせた心づくしの料理を作り上げているのだ。厳つい顔の仁王様みたいな男だが、手先と心遣いが細やかな老爺なのだ。その料理を気に入ってここに通う客が多い。若旦那だってこは大好きだ。だから、こんな粗末に扱われるのは我慢がならない。

主従揃って、物の価値を判つてないようじゃアないか。そんな輩に、葉種問屋会所なんぞ作らせるわけにはいかないよ。若旦那は腹の中で改めて決意を固める。

「へ、へえ。ただいま」

若い衆が限界だと判断したらしく、そう返事をして襖を閉めた。帳場に相談しに行くのだろう。その若い衆と女中へ、「おーい」「こっちこっち！」と潜み声で若旦那達が声を掛ける。

「なん……」

なんです、と今そんな暇はないと言いたげに近づいてくる若い衆の口を塞ぐと、花助と若旦那で二人を座敷に引っ張り込んだ。

「隣の座敷、田佐木屋の番頭って本当ですか？」

潜み声で尋ねると、口を塞がれたままの二人がうんうん、と頷いた。

「いいかい、まずは女将さんにお話しなさい。それから、言う通りにあのお客にお酒を。その分はアタシが払いましょう。それからね、ここから先はちよいとアタシに任せとくれ、と言っておくれ。そうそう、三味線あるかい？」

しい、と指に口を当てながら、若旦那が小さな声で二人に指示を出した。

そんな中、隣の座敷では、うー、だの、バカにしゃがって！ などの文句がブツブツ聞こえてくる。

「どうするんです？」

女中と若い衆が出ていくと、花助が問う。

「なに、直接話を聞いてやろうとおもってね」

若旦那はにやりと笑った。

「……また大胆なことを……」

花助が呆れた顔をする。

「おや、お前が行くかい？」

若旦那が言うと、花助はぶるぶると全力で顔を振って、これ以上ないと言うほどにイヤだと言う意志を表す。

「まあ、お前じゃあ幫間だとすぐにわかつちまう。だからこそその、アタシですよ。薄暗い中端唄の一つでも歌えば大丈夫でしょう」

「なっ……！」

花助は余りの話に思わず声を上げ、大声を出してはいけないことに気付いて、自分

で自分の口を塞ぐ。

「ナニ、あれだけ酒が入ってりやあ、大丈夫ですよ」

そう言つて、若旦那が手に握っていた手拭いに改めて気づく。そして、指の先で恐る恐るつまんで、花助に差し出した。

「……お前、こりやいつから懐に入れておいでだい？ 流石に臭いよ」

「鼻水までつけておいて、文句言うこたアないでしょ」

花助も指先でこわごわと手拭いを抓んだ。

「お客人、お待ちどうさんでござんす」

するすると襖を開けて、薄暗い座敷に若旦那が入り込む。この座敷の行灯を点けさせなかったのもわざとである。

「……遅い」

呑み散らかした銚子が床に転がっている。盃もあったが、すっかり酔っているのか

番頭の手から落ちていた。

「これは不調法でございました。お馴染が判らなくなつて、まあ今宵はアタシでござんて、お勘弁くださいな」

横座りで傍に座を占めると、若旦那は優しい口調でそう言つて新しい盃を手に取りせる。声も手も、もしかするとこの薄暗さで顔も見えていて、どうやっても芸者ではないと判つてしまうかもしれない。その危険性は常にある。

だが、番頭は芸者の方などちらりと見もしない。

「まずはお一つ」

ほつとしてそう言つて注いだ酒を、番頭はおざなりにくいつと呷つて、目の前の床を睨むように見たまま盃を出した。若旦那は再び酒を注いでやりながら、座敷をざつと見る。

銚子が十本つてとこか。この前にどこかで飲んでりや、相当飲んでますねえ。半分水の酒でも判らないんだから。

対する番頭は、やや恰幅の良い体格だが、酔いか疲れか、胡坐なのか足を投げ出して座っているのか判らないだらしない姿勢だ。着物は物は良さそうな手触りだ。だが、

草臥れ切っている匂いがする。洗い張りどころか、香を焚く手入れも満足に出来ないのだろう。鬚もなかなか結い直せないようだ。古びた油の匂いがした。

今一番勢いをつけて来ているお店の番頭がこれとは、驚きである。

注いでは空けて、注いでは空けてが続く。若旦那が持ち込んだ銚子が二つ空いたところで、流石に呑み過ぎてしまったのだろう。ふと酒を飲む手が止まる。

「お客人？」

黙り込んでしまったのを見て、流石に粗相をする流れか、と若旦那は心配になる。番頭の具合も心配だが、話が何も聞けないのでは困ると言うのが本当のところだ。

「う、うえ……」

番頭が洩らした声に、すわ、廊下に用意して貰った湯冷ましと盥の出番かと思う。

「ご気分でも……？」

背中に手を当てて擦る。

「うええ……」

盥か、と思ったが、出たのは男の泣き声だった。大の大人、それももうそろそろ老境に入ろうかって頃合いの男が、声を上げて泣いているのである。まさか泣かれると

は思っていないかった若旦那は、呆気にとられ、次いで慌てた。

「や、こりゃ、困ったね。泣くなんざ、何があったってえんです？」
肩を抱いて思わずいつもの調子で聞いてしまう。

「……、あたしゃね。悔しくって仕方がないんですよ」

「それはそれは……。泣くほどなんて、よっぼどでしょう」

若旦那の言葉に、番頭は堰を切ったように話し始める。

「仕事が出来ないだの、愚図だの、好き勝手に言っつて。そう言うアンタはナニしてるんだって話ですよ。女郎にうつつ抜かして、仕事も会所の件も放つたらかして……」
おっと。いきなり本命が出ちまったよ。

若旦那は身体がびくりとしたのを誤魔化すように、ゆっくりと番頭の肩を揺すつてやる。

「最初は、二人であちこち駆けずり回って、頭下げまくって……。忙しくても、二人でやってきたから、ここまで来たんじゃないですか。それがいつの間にか楽しい席は自分だけで行つて。相変わらずあたしはあちこち駆けずり回って、生意気な船頭たちや、何度話しても要領を掴めない田舎者やら、ケチな上に欲張りな役人たちにぺこぺ

こ頭下げて、おべつか使つて……」

あー……、そりや怒るわなあ。

若旦那は番頭に同情する。田佐木屋の商売自体はとても認められないが、それでもこうやって身を粉にして働く者が居るのは素晴らしいことだ。だからこそ、一緒に働く者をないがしろにするのも許せないし、それも人を騙したり陥れたり、あまつさえ己の利だけを追い求めるだけのやり口なのは、商売をする身としては認めがたい。

「そもその話、あの人が主人になつた時から、いや、主人に収まられるように色々手を貸したのはあたしですよ？　一緒に手を汚してやったのはあたしじゃないですか。それを……、よくも……！」

番頭はそう言うと、がばー！　つと若旦那の膝に突つ伏して、子供のように泣き始めた。

膝枕はしてもらうのが当たり前だと思つていたんですがね。まさかお父ツ様ほどの男に膝を貸すことになろうとは、この世はなにが起るか判つたもんじゃないねえ……。それにしたつて、こんな男の膝で気付かないもんですかね。

おいおいと泣く男に驚いたり、呆れたりしていた若旦那は、こうなつたら仕方がな

い、と腹を括る。そして、とん、とん、と優しく泣いている番頭の肩を宥めるようにゆっくり叩いてやった。

「ありやま、こりや参ったね」

暫くの後、蒔野屋の若旦那は、苦笑いで呟く。

己の腰には、グデングデンに酔っ払って正体をなくした男が、滂沱の涙を流しながらしがみついて寝ている。がちちりと腕が回っていて、抜け出せそうにない。

「若旦那……」

別座敷で控えていた花助が、そろりと襖を開けて顔を出した。

「おや、お取り込み中でございましたか」

若旦那と男の状態を見て、すすす、と襖を閉じかける。

「お前ね。そりゃあ、これは私がやったことだから自業自得だけどね。この様を見て置いてくってえんなら、流石に恨みますよ」

若旦那がムツとした声で言う。

「いやですよ、旦那。冗談冗談」

デヘへ、と花助は笑いながら袖に手を仕舞った状態で、ちよんと自分の頭を叩く真似をする。

「とは言え、どうしやしよう？」

「どうするかねえ？」

二人は顔を見合わせた。

「いっそ添い寝でもしやすか？」

花助が閃いた、とばかりに言う。

「そりゃ私の顔立ちは、小野小町か弁天小僧かって具合だけでもさ」

「その自信はどこから来るんですかねえ」

花助がまぜつ返す。

「お黙り。だからって井戸を貸すのはごめん被りたいね。第一、好みじゃないよ」

「ほう、好みなら貸しても良い、と」

「まぜつ返すね。ともあれ添い寝で万が一があっちゃあ……」

若旦那がふと黙る。

「若旦那？ まさか好みでしたか？」

花助が心配そうに声をかける。

「いや、相変わらず微塵も好みではないよ。けど、これでなんとか恩を売れないだろうかね」

若旦那が言う。

「蔭間に入れ込んでるって話は聞きやせんから、普通は起きて若旦那が隣にいたら、据え膳食らってやろうってえ前に、驚くでしょうけどねえ……。ええ、ご面相の方も小野小町も弁天小僧も名前出すなって怒る具合ですし」

「失礼な。これでもお祖父様とお祖母様には、可愛い可愛いって褒めて育てられたんですよ」

「そりゃ孫は可愛いでしょうよ」

若旦那が口を尖らせてむくれるのを、花助が冷静に言う。

「冗談はさておき」

「私は至って真面目ですよ」

「それもとりあえず、さておき」

花助が嗜める。

「一応商売敵でしょう？ あれだけ愚痴を言っていたからと言って、そう簡単に恩が売れるものですかね？」

「ならお前が変わるかい？」

「嫌ですよ。じゃなくて、アタシでも大して変わらないでやしよう？ たかが幫間に恩を感じますかね？」

うーん、と二人が考え込む。

若旦那の腰にしがみついた男は、すうすうと寝息を立てている。

「ま、やるだけやってみるさ」

若旦那はそう言うのにやりと笑った。その顔を見て、花助はぞっと怖気を奮いながら、この後の番頭が陥るであろう事態を想像して、同情の念を禁じ得なかった。

田佐木屋の番頭が、自分の犯した失態を知って酒を止めようと固く誓うのは、もう暫く後のことだ。

#CC0240506 超 COMIC CITY ONLINE -240506-

寝床屋の無料配布

2024/05/06 刊

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: @nedocoya4pr

ようこそお出で下さいました。
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

今回も長くなってしまった……。
昨夏に出した、会所騒動の続きとなります。
今回は若旦那のお話です。
少しずつ少しずつですが、進んでおります。
というわけで、頑張って続きを書いてまいりますので、
お気が向きましたらば、ご覧くださいませ。

寝床屋は、江戸時代を中心にあんまり剣豪とかが
出てこないお話を、番頭さんとかわなをと、
丁稚こと扇坊の二人で書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

* おねがいとおことわり *

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

- ・ 有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。
- ・ 本書を有償にて再配布する行為。

本書の内容は今後の頒布物に収録される場合があります。また、その際にサイトでの掲載を取りやめる場合がございますので、予めご了承くださいませ。

本書は無料配布として作成したものです。